

総合情報処理センターの発足

神戸大学副学長（工学部教授） 北村 新三

平成 15 年 4 月より従来の総合情報処理センターが学術情報基盤センターに改組拡充されることになりました。ここにお世話になりました関係各位に厚く御礼を申し上げます。総合情報処理センターの設置は昭和 57（1982）年で、それから 20 年以上を経ております。偶然とは思いますが、新センターの設置準備委員会の委員長を仰せつかってその組織をつくる日ごろ、昔のことがいろいろと思い出されます。

昭和 39 年に計算センターが設置され、大学院学生であった私は OKITAC5090 というコンピュータに Algol でプログラムして微分方程式を解いたことを鮮明に覚えております。しかし、この時代のことを知っている現役教官は少なくなり、年齢からすると高森年工学部教授（後に総合情報処理センター長）と私が最年長になってしまいました。昭和 59 年にこの MAGE という冊子にセンター関係についての 20 周年特集が組まれております。しかし、この特集号に寄稿された先輩の方々のほとんどは退官され、また他界されてしまった方々も多くおられます。これが時の流れなのでしょう。

神戸大学に高度の情報処理システムが必要であるとの認識は各分野の研究者から出されていたのですが、それが具体的な動きになったのは、（故）須田勇学長の時です。これは古い関係者には周知のことではありますが、先生は時代がコンピュータを要求している、あるいは同時に進められていた自然科学研究科など、大学院の整備のためという発想のみでなく、大学という知識集団が、学術情報の創出を行うことは当然であり、これを外部に向かって発信した収集する能力を持つべきであることを強調されました。その後、時代はまさにその方向に動いてきましたが、残念ながら、世界的観点から見ると、我国の研究者（あるいは為政者かもしれませんが）は、その認識は未だに十分でないようです。先生が当時、とくにつよく要望されたことは、この目的達成のために、データベースを構築するということでした。このためには、計算するという大型そろばんではなく、学術情報を扱えるシステムでありました。

私が計算センター主任になったのは昭和 54 年（1979）年度です。このときまでに計算センター委員会委員長を勤められた（故）松本隆一教授（工学部）、（故）小野二郎教授（経営学部）、センター主任の高森助教授（当時）らのご努力により上記の目的を実現するための方策がまとめられ、すでに教務学籍情報データベースも稼働し、情報処理教育も始まっておりました。そこで当面の目標はまず大型のシステムを導入できるだけの計算機借料を獲得し、省令化センターとしての総合情報処理センターを設置することでありました。昭和 55 年当時では、総合情報処理センターという組織は東京工業大学に一つ設置が認められている状況でした。須田学長から直々に文部省へ行って交渉するようにご指示を受け、計算センター委員会委員長の井関清志教授（理学部、現在名誉教授）ともご相談して、経理

部長と一緒に昭和 55 年の初夏に当時の情報図書館課を訪問しました。もちろん、文部省の建物へ入ったのも初めてでした。そのときまでには少々の情報も得ており、またどのような資料が要求されるかもわかっておりましたので、センター助手の鷹岡康夫氏（現在 姫路独協大教授）と福島徹君（現在 姫路工業大教授）の助けを得て、資料を作成しました。

文部省では課長補佐と係長が対応していただきましたが。しかし、このときの内容は、神戸の状況も理解はできるけれど、こういうものは今までの積み上げや順番もあり、すぐには無理だということでした。来年は広島大が予定されているとも聞きました。それでは次は神戸でしょうかと尋ねると、まだその間に他の大学がいるということを暗示され愕然としました。来年はとりあえずだめということで、再来年に向けてまた来ますのでよろしくと言った帰り際に、同席の係長から「データを揃えて早めに動いてください」と小声で忠告を受けました（この方には神戸大学はその後もういろいろとお世話になっております）。そういうことなら、須田学長の理念と学内の需要度を再構築して望むことにしよう、約半年を掛けて資料作成を行い、当時学術調査官をされていた筑波大の中山和彦教授にもご相談し、文部省との交渉も昭和 56 年の始めから開始しました。昭和 56 年度には担当が学術情報課にかわり、このときの担当課長は相当の理論家で、いろいろとやり取りをしたことも思い出されます。これらの効果があったのか、もちろん、学長、事務局長の支援もあってのことですが、昭和 57 年度の総合情報処理センターの設置と初年度 3 ヶ月分の計算機借料が認められました。全国で 3 番目の省令化センターでした。

総合情報処理センターの設置目的は、研究、教育、事務処理（図書館も含む）の分野における情報の処理システムをデータベースとオンラインネットワークを通じて構築していくことであります。センターの新築位置は工学部の西側（現在の本館）となったことも、図書館機能との連携に配慮してのことでした。また、旧館との情報伝送のために、光ファイバーネットワークを設置したのも国立大学としては目新しいものであります。当時の計算センター委員会（後の運営委員会）やセンター設置準備委員会のメンバー表を見ますと、利根川孝氏（理学部）、伊勢崎修弘氏（理学部、現在 千葉大）、豊田利久氏（国際協力研究科）、丸谷冷史氏（経済学部）、宮下国生氏（経営学部、現在 学長補佐）、谷武幸氏（経営学部、前副学長）、森脇俊道氏（現在 工学部長）、森英樹氏（医学部、現在 姫路独協大）、下条哲司氏（経済経営研究所）、定道宏氏（経済経営研究所）（故）川口正昭氏（教養部）、依田博氏（教養部）、田中榮博氏（事務、現在 金沢大学経理部情報処理課長）、田中素由氏（事務、現在 経理部共済組合掛長）らに大変お世話になったことを思い出します。

その後の情報ネットワークシステムの技術進展は予想もできなかった状況になっております。大学が学術情報のみを対象とする時代はすでに過ぎ去りました。大学は世界という大きなネットワーク組織での一つの個であるとともに、全体を牽引していく新しい流れの種を生み出していく場にもなっているでしょう。情報という枠組みからはみ出て倫理の問題なども深刻化し、今後の展開も予想しがたいという印象です。

今年 10 月には神戸商船大学との統合を、来年 4 月には大学法人化を控え、これにも新しい組織である学術情報基盤センターが対応していくことになりませんが、学内各位のご支援をお願いいたします。